指導と評価の年間計画・評価規準の作成について

２　地理歴史

＜目次＞

Ⅰ　「指導と評価の年間計画」及び「評価規準と単元計画」の作成の手引き　Ｐ１～２

Ⅱ　「指導と評価の年間計画」（世界史Ａ）＜例＞　Ｐ３

Ⅲ　「評価規準と単元計画」（世界史Ａ）＜例＞　Ｐ４～５

Ⅳ　「学習指導案」（世界史Ａ）＜例＞　Ｐ６

Ⅰ　「指導と評価の年間計画」及び「評価規準と単元計画」の作成の手引き

１　「指導と評価の年間計画」について

これは、次の２の「評価規準と単元計画」の全単元について、その概要を記述したものである。生徒の学習活動に対するより適正な評価、及び生徒の学習の改善に生かされる評価（指導と評価の一体化）の実現を目指して作成する。

これまで作られてきた指導計画は、多くの場合、学習内容（指導内容）を単に１年間の授業時間数に対して配分しただけに留まっていたが、この「指導と評価の年間計画」では、「学習項目」、「授業時間数」、各授業ごとの「主な学習活動（指導内容）と評価のポイント」、「評価方法」を記述する。

２　「評価規準と単元計画」について

学習指導要領に基づく「評価規準と単元計画」は、言い換えれば、評価規準を盛り込んだ「単元ごとの指導と評価の計画」である。次の内容構成で作成する。

◎「単元名」、「単元の目標」、「単元の評価規準」、「指導と評価の計画（○時間）」を示す。なお、「単元」とは、ほとんどの教科書の「節」に該当するものである。

・「単元の目標」

実際の使用教科書等に基づいた授業の進度に沿って単元ごとに示した目標。学習指導要領の項目ごとのねらいをもとに記載する。

・「単元の評価規準」

単元ごとに４観点別に示した評価規準。「内容のまとまりごとの評価規準」を単元の内容に即して具体化したもの。

◎「指導と評価の計画（○時間）」を示す。そこには、「次程」、「学習活動」、「評価の観点」、「評価規準等」を示す。

・「学習活動」、「評価の観点」

上記の１の「指導と評価の年間計画」の「各授業ごとの主な学習活動（指導内容）と評価のポイント」に反映されていなければならない。

・「評価の観点」

「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「資料活用の技能」及び「知識・理解」に評価の観点を整理し、各教科等の特性に応じて、適切に設定しなければならない。

・「評価規準等」

評価規準は、「目標」を具体化したものであり、目標が生徒の学習状況として実現された状況を具体的に想定して示す。

・「評価方法」

評価方法については、各学校で各教科・科目の学習活動の特質、評価の観点や評価規準、評価の場面や生徒の発達の段階に応じて、観察、生徒との対話、ノート、ワークシート、学習カード、作品、レポート、ペーパーテスト、質問紙、面接などの様々な評価方法の中から、その場面における生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択していく。

※平成２４年３月に、国立教育政策研究所教育課程研究センターから、「評価基準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校　地理歴史）」が示され、次のＵＲＬからダウンロードすることができる。

http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/kou/02_kou_tirirekishi.pdf

「評価規準と単元計画」＜例＞

（１）単元名：○○○○

（２）単元の目標
ア　○○○○○○○○
イ　○○○○○○○○
ウ　○○○○○○○○
エ　○○○○○○○○

（３）単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
・○○○○○○○○ ・末尾の表現 （例）「～に対する関心と課題意識を高めている。」「～について意欲的に追究している。」等	・○○○○○○○○ ・末尾の表現 （例）「～について，多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。」等	・○○○○○○○○ ・末尾の表現 （例）「～から有用な情報を適切に選択している。」「～を図表などにまとめたりしている。」等	・○○○○○○○○ ・末尾の表現 （例）「～を理解し，その知識を身に付けている。」等

（４）指導と評価の計画（○時間）

次	学習活動	関	思	技	知	評価規準等
第一次（○時間扱い）	【ねらい】○○○○○○○ ・末尾の表現 （例）「～をつかませる。」「～を捉えさせる。」「～について理解させる。」「～を展望させる。」「～を高めさせる。」「～について説明させる。」「～を見い出させる」「～について考察させる。」「～を表現させる。」等 ・学習活動の主な項目を記載する。	・該当する評価の観点に，●を記載する。				・評価の規準及び具体的な評価の方法を記載する。
第二次（○時間扱い）	【ねらい】○○○○○○○					

Ⅱ　「指導と評価の年間計画」（世界史A）　＜例＞

2単位

到達目標 【学習指導要領】	・近現代史を中心とする世界の歴史を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ、現代の諸課題を歴史的観点から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。
到達目標に向けての具体的取組 【指導上の留意点】	・中学校の歴史的分野や地理分野の学習を踏まえて、地理的条件や日本の歴史との関連に留意させながら、諸文明の特質と現代世界の形成過程を理解させる。 ・人類の諸課題を追究する学習などを通して、現代社会に関する認識を深め、歴史的思考力を培う。 ・歴史的事象に対する興味・関心を高め、主体的な学習態度を育成する。 ・世界の歴史に関する情報を収集する技能、収集した情報を整理する技能、それらを解釈して表現したり説明したりする技能など、世界史学習の基本的技能を育成する。

月		章	学習項目	時間	主な学習活動（指導内容）と評価のポイント	評価方法
4	第1部	世界史へのいざない① ア　自然環境と歴史		2	・今日の世界がどのように形成されてきたのかを、世界史の舞台となった地域の自然環境について、地図や写真から読み取る活動を通して、自然環境と人類の活動が相互に作用し合っていることに気付かせる。	レポート 発表
4 5		近・現代世界史の背景 第1章	ユーラシアの諸文明 1　東アジア世界 2　南アジア世界 3　西ｱｼﾞｱ世界 4　ヨーロッパ世界	8	・自然環境、生活、宗教などに着目させながら、ユーラシアの各地で形成された諸文明の特質について概観させる。 ・漢字文化、儒教、中国を中心とする国際体制に触れ、日本を含む東アジアの特質を捉えさせる。 ・仏教とヒンドゥー教、カースト制度、イスラームの影響などに触れる。 ・古代オリエントの遺産、イスラームなどの特質について概観させる。 ・古代ギリシア・ローマの遺産、キリスト教などに触れて、その特質を概観する。	観察 ワークシート 小テスト
5		世界史へのいざない② イ　日本列島の中の世界の歴史		2	・中学校で学んだ歴史分野及び地理分野の学習を基に、日本列島の中に見られる世界との関係や交流について、人、もの、技術、文化、宗教、生活などから適切な事例を取り上げ、年表や地図などに表す活動を通して、自然環境と人類の活動が相互に作用し合っていることに気付かせる。	レポート 発表
6		第2章	ユーラシアの交流圏 8世紀ごろの世界と交流 13世紀ごろの世界と交流	3	・8世紀と13世紀のユーラシアの海、陸における交流について取り上げ、ユーラシアの地域間交流が後の世界一体化の前提になったことに気付かせる。	観察 ワークシート
6 7	第2部	成熟するアジアと世界へむかうヨーロッパ 第3章	アジア諸帝国の繁栄とヨーロッパ 1　中華帝国の繁栄と東アジア 2　15～17世紀の東アジア 3　西ｱｼﾞｱと南アジア 4　16世紀のヨーロッパ 5　ヨーロッパの主権国家体制の成立と世界商業の進展	9	・ヨーロッパでのルネサンスや宗教改革などの動きとともに、経済繁栄を誇るアジア諸地域の物産を求めるヨーロッパ人によって海外進出が始まったことに触れる。 ・明・清時代の中国の政治・経済の発展について理解させる。 ・日本・朝鮮などのを含めた東アジア世界の発展について理解させる。 ・オスマン帝国、ムガール帝国の安定した支配と経済の繁栄について理解させる。 ・16世紀に開始された世界的規模の商業がヨーロッパの経済や国際関係に与えた影響を把握させる。 ・ヨーロッパに成立した主権国家体制を扱い、それが一定の領域と独立の主権を備えた国家が並立し競合するものであったことに触れる。	観察 ワークシート 小テスト
7 8 9		第4章	大西洋世界の変容とその波及 1　ヨーロッパとアメリカ諸革命 2　産業革命と世界市場の形成 3　ヨーロッパの動乱の波及	6	・18世紀後期から、19世紀までのヨーロッパ、アメリカを扱い、工業化と国民形成が進行したことを理解させる。 ・西ヨーロッパやアメリカ合衆国では、市民の政治的発言権の拡大が進み、国民国家形成の動きが生まれたことを理解させる。 ・イギリスではじまった産業革命について、資本主義が確立し資本家と労働者が形成され、労働や社会生活の在り方に変化がみられたことに触れる。 ・アメリカ合衆国の成立やフランス革命、ラテンアメリカ諸国の独立を大西洋世界で起こった一連の政治的変動として扱う。	観察 ワークシート 小テスト レポート
9		第5章	産業化社会の拡大と成熟 1　ウィーン体制とその崩壊 2　国民国家への道	5	・ナポレオン戦争を通じて広まった国民主義が、ウィーン体制化で、自由主義とともに高まりを見せたことを理解させる。 ・イギリスやフランスに続いて、19世紀後半にドイツ、イタリアなどで国民国家が形成されたことを理解させる。	観察 ワークシート 定期考査
10		第6章	アジア諸国の変貌と日本 1　東アジアの変容 2　東南アジアの変容 3　南アジアの変容 4　西ｱｼﾞｱ、アフリカの変容	6	・ヨーロッパ進出期におけるアジアの状況、植民地化や従属化の過程での抵抗と挫折、伝統文化の変容、その中での日本の動向を扱い、19世紀の世界の一体化と日本の近代化を理解させる。 ・アジアの諸帝国の状況を扱い、財政難や支配下の諸民族の自立への動きなどにより支配体制が動揺し、更にヨーロッパ諸国の進出によって伝統的な国家体制や貿易の仕組みも変化を余儀なくされたことを理解させる。 ・植民地化や従属化の過程を扱い、社会や経済の変動、ヨーロッパの近代文明との接触に伴う伝統文化の変容などに触れる。	観察 ワークシート 小テスト
10 11	第3部	現代の世界と日本 第7章	帝国と民族の時代 1　急変する人類社会 2　植民地の拡大と深まる国家の対立 3　アジア、アフリカの抵抗運動	8	・科学技術の発達や高度化を背景とした社会の急激な変化を理解させ、それ以前とは性格が異なる新しい社会が出現したことについて、人類史的視野から考察させる。 ・欧米諸国は工業製品の市場や資本の輸出先、資源確保のためにアジア・アフリカなどに進出し、軍事力を背景に植民地獲得や勢力圏拡大の競争を繰り広げたことを理解させる。 ・次第に民族意識が醸成され、各地で様々な対応が起こったことを理解させる。	観察 ワークシート 小テスト
11 12		第8章	二つの世界大戦の時代 1　第一次世界大戦 2　戦後秩序の形成 3　世界恐慌とファシズム 4　第二次世界大戦	8	・第一次世界大戦の原因や性格、戦争がもたらした世界の変化を扱い、戦時下の総力戦体制に触れるとともに、大戦中にロシアで社会主義革命が起こったことを理解させる。 ・国際連盟やアメリカ合衆国の役割、ヴェルサイユ・ワシントン両体制の理念と現実の違いについて触れる。 ・世界恐慌の原因及びアメリカ合衆国を中心に各国の恐慌対策に触れるとともに、ファシズムの台頭を大衆社会化現象と関連付けて理解させる。 ・戦争被害の甚大さや戦争の複合的な性格を理解させる。また、戦争の過程で生じてくる米ソ冷戦の芽や原爆使用が戦後の国際政治や日本に与えた影響、国際連合に込められた平和や人権の確立への願いに気付かせる。	観察 ワークシート 定期考査
12 1		第9章	冷戦と民族独立の時代 1　戦後世界の形成 2　アジア、アフリカの民族運動 3　冷戦体制の動揺 4　冷戦の終結	8	・戦後まもなく、米ソを中心とする両陣営の対立が、朝鮮戦争などを経て、冷戦として世界に広がっていったことを理解させる。 ・戦前の植民地の大半が独立し、これらの第三世界が冷戦構造に変化を生じさせたことを理解させる。 ・冷戦の終結と、国際社会が直面した新たな課題について、歴史的背景を踏まえて理解させる。	観察 ワークシート 小テスト
2 ・ 3		第10章	グローバル化のなかの危機 1　グローバル化と諸地域の模索 2　現代の戦争と平和	5	・1970年代以降の市場経済のグローバル化、冷戦の終結、地域統合の進展、知識基盤型社会への移行などを理解させ、地球社会の歩みと地球規模で深刻化する課題について考察させる。	観察 ワークシート 定期考査
		持続可能な社会への展望		5	・現代世界の特質や課題に関する適切な主題を設定させ、歴史的観点から資料を活用して探究し、その成果を論述したり討論したりするなどの活動を通して、世界の人々が協調し共存できる持続可能な社会の実現について展望する。	発表、論述

合計時間数　75

Ⅲ　「評価規準と単元計画」（世界史Ｂ）　＜例＞

□単元名：「ウィーン体制の成立と動揺」

□基軸となる問い：
　「ウィーン体制はなぜ崩壊していったのか？」

□単元の目標：
　ナポレオン戦争後の１９世紀前半のヨーロッパを中心とした国際関係を、ウィーン体制の成立とその後の動揺を通して考察させる。その際、後の近代史で重要となる、「自由主義」、「ナショナリズム」、「社会主義」等の概念の諸相について、当時の人々の主張の中から抜き出し、ワークシートなどにまとめさせながら、現代の国際情勢と結び付けて考えさせる。

□単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
・ウィーン体制の成立とその後の動揺の要因や背景について、関心と課題意識を高め、意欲的に追及している。	・ウィーン体制の成立とその後の動揺の要因について、歴史事象の推移や変化、相互の因果関係を多面的・多角的に考察し、歴史の展開における諸事象の意味や意義を解釈して、その過程や結果を適切に表現している。	・歴史資料を含む諸資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図や表にまとめたりしている。	・ウィーン体制の成立とその後の動揺の要因や背景について、歴史の展開における諸事象の意味や意義を理解し、その知識を身に付けている。

□指導と評価の計画（３時間）
　第１次「ウィーン体制の成立」（１時間）
　第２次「ウィーン体制の動揺」（１時間）
　第３次「１８４８年革命」（１時間）

次程	学習活動	評価の観点				評価規準等
		関	思	技	知	
第１次（１時間扱い）	**ウィーン体制の成立** ≪問い≫ ナポレオン戦争後のヨーロッパの秩序再建を討議する国際会議が、なぜウィーンで開かれたのか？ 【ねらい】 ウィーン会議が開催された背景や、ウィーン体制がどのような秩序を目指したのかを、諸資料を活用し、会議に参加した各国の主張を表にまとめさせることなどを通して理解させる。					
	○ナポレオン戦争後のヨーロッパの勢力図を、地図で確認させる。 ○会議がウィーンで開催されたことに着目させながら、ウィーン会議に参加した各国の利害関係をワークシートにまとめさせる。 ○ウィーン会議によって求められた国際秩序について、大国の利益確保と、ナポレオン戦争が残した自由主義やナショナリズムなどの影響に着目させながらまとめさせる。	○			○	・ウィーン体制の成立の要因や背景について、歴史の展開における諸事象の意味や意義を理解し、その知識を身に付けている。（ワークシート） ・歴史事象の推移や変化相互の因果関係に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追及している。

第２次（１時間扱い）	**ウィーン体制の動揺** ≪問い≫ ウィーン体制を揺るがしていったのは、どのような勢力か？ 【ねらい】 ウィーン体制に反対した勢力の主張や社会的階層を調べ、ワークシートにまとめさせることで、ウィーン体制がどのような勢力によって揺さぶられていったのかを考えさせる。					
	○1815 年以降、ウィーン体制を揺るがす各国の動向について、ワークシートにまとめさせる。 ○オスマン帝国からの独立をめざしたギリシアの独立戦争や、スペインの植民地支配から独立を求めたラテンアメリカ諸国の動向が、なぜウィーン体制を揺さぶる要因となったかを考察させる。 ○当時の自由主義、ナショナリズム、社会主義などを求めた人々の主張を読み、彼らが求めた社会について、グループで話し合いながらワークシートにまとめさせる。		○	○		・歴史資料を含む諸資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり表にまとめたりしている。 （ワークシート） ・ウィーン体制の動揺の要因について、歴史事象の推移や変化、相互の因果関係を多面的・多角的に考察し、歴史の展開における諸事象の意味や意義を解釈して、その過程や結果を適切に表現している。 （観察、ワークシート）
第３次（１時間扱い）	**１８４８年革命** ≪問い≫ フランスの七月革命と二月革命の違いは何か？ 【ねらい】 フランスの二月革命について、その社会的な要因を、七月革命と比較して考察させる。また、「諸国民の春」と呼ばれた 1848 年の各地の「革命」について、ナショナリズムや諸階層間の対立等を考慮しながら、その後に与えた影響について、ワークシートにまとめさせて、考察させる。					
	○七月革命と二月革命の担い手を比較することで、1830 年と 1848 年の社会の変化について考察させる。その際、二月革命における、社会主義者や労働者階層の役割に着目させる。 ○1848 年の各地の「革命」について、その担い手の要求を表にまとめて、ナショナリズムや社会主義など、その後の近代史において重要な言葉（概念）の諸相について考察させる。		○			・ウィーン体制の成立とその後の動揺の要因について、歴史事象の推移や変化、相互の因果関係を多面的・多角的に考察し、歴史の展開における諸事象の意味や意義を解釈して、その過程や結果を適切に表現している。

Ⅳ　「学習指導案」（世界史Ａ）　＜例＞

教科（科目）	地歴公民（世界史Ａ）	単元名	ウィーン体制とその動揺
本時の位置付け	単元　第１次　ウィーン体制の成立（１時間）　…　本時（１時間目） 第２次　ウィーン体制の動揺（１時間） 第３次　１８４８年革命（１時間）		
本時の主題	ナポレオン戦争後のヨーロッパの秩序再建を討議する国際会議が、なぜウィーンで開かれたのか？		
本時の目標	ウィーン会議が開催された背景や、ウィーン体制がどのような秩序を目指したのかを、諸資料を活用し、会議に参加した各国の主張を表にまとめさせることなどを通して理解させる。		
評価規準	ウィーン体制の成立や背景について、歴史の展開における諸事象の意味や意義を理解し、その知識を身に付けている。【知識・理解】		

過程	指導の内容	学習内容	指導上の留意点・観点別評価
導入	前時の振り返りと本時の主題の説明。	≪ＭＱ≫ ナポレオン戦争後のヨーロッパの秩序再建を討議する国際会議が、なぜウィーンで開かれたのか？ ・本時のＭＱを提示し、フランス革命からナポレオン戦争に至るこれまでの学習を振り返り、革命の理念やナポレオン戦争の功罪について、確認させる。	・前時の復習 ナポレオン戦争の功罪について、自由主義とナショナリズムに触れながら概説する。
展開	ワークシートに従って作業を進める。 ペアワーク グループワーク （４人一組）	【作業１】 ・ウィーン会議後（1815 年）のヨーロッパの勢力図を、ワークシートの地図で確認させる。 ・フランス革命前のヨーロッパの勢力図と、ウィーン会議後の勢力図を比較させ、気付いたことや疑問点を挙げて、疑問点に関しては、仮説を立てさせる。（ペアワーク） ≪ＳＱ①≫ 敗戦国のフランスの領土は革命前と比べてなぜ大幅に減らなかったのか？ 【作業２】 ・ウィーン会議の参加国と、会議の概要について、ワークシートに従い、まとめさせる。 ≪ＳＱ②≫ 「正統主義」とは、どのような理念か？　旧秩序の復活ならば、なぜ神聖ローマ帝国は復活しなかったのか？ ・「会議は踊る」と表現された、列強の利害対立について、理解させる。 ・ポーランドの状況について、ショパン（ポーランド出身のロマン派音楽を代表する作曲家）の生涯を紹介しながら、簡単に説明する。	・フランス革命前のヨーロッパの勢力図と、ウィーン会議後の勢力図を比較させる。 ・「敗戦国」であるフランスの版図に注目させ、ＳＱ①を提示し、ウィーン会議が、どのような理念で運営されたかを、考えさせるきっかけをつかむ。 ○ウィーン体制の成立と背景について、歴史の展開における諸事象の意味や意義を理解し、その知識を身に付けている。【知識・理解】（ワークシート） ・会議の理念や内容から、その後のウィーン体制の動揺の要因を示唆する。 ・ロマン主義とは何か、またロマン主義を生み出す社会的背景を考えさせる。
まとめ	本時のまとめ	・ウィーン体制の理念と内容を整理し、今後、どのような勢力がウィーン体制を揺るがすことになるのかを、考えさせることで、本時のまとめと次時の「ウィーン体制の動揺」の予告とする。	・まとめに当たって、学んだ知識･概念を適切に使用しているか。 ・本時への取組を自己評価させる。 ○ワークシートの提出